

[道 徳]

小学校入門期における道徳科授業の評価について

－役割演技における監督役割に着目して－

林 誠仁*

1 問題の所在

2018年4月から小学校で、「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」と表記）が全面実施となり、教員には年間35時間（小学校1年生は34時間）の道徳科授業の確実な実施と共に、道徳科における評価を指導要録に記述することが新たに求められた。文部科学省（2015）¹⁾は、道徳教育や道徳科の評価について、「道徳性が養われたか否かは、容易に判断できるものではない」と指摘し、「道徳科の評価の具体的な在り方については、（中略）専門的に検討を行い、教師用指導資料の作成や指導要録の改正を行う」こととした。それは、道徳性、つまり児童の内面を推し量ることの困難さを意味している。ところで、ここでいう「専門的に検討を行う」ために組織された道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議（以下、「専門家会議」と表記）（2016）²⁾は、道徳科の評価に関して「学習状況や指導を通じて表れる児童生徒の道徳性に係る成長の様子を、指導のねらいや内容に即して把握する必要がある」と述べ、「一面的な見方から多面的、多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関りの中で深めているか」といった点に着目することを求めている。

そこで、2018年に6学年を担当した際、筆者は表1で示した方法を用いて学習状況を見取ってきた。

表1 道徳科授業の学習状況を見取る方法

- | | |
|---|--|
| ア | 道徳科授業の終末に「今日の授業で分かったこと、考えたこと」を書く時間を設定すること |
| イ | アでの児童の記述を基に「どうしてそう思ったのか」を面接で聞き取り、その理由を更に付け足しすること |
| ウ | 黒板に記述された内容を撮影すること |
| エ | 役割演技を実施し、演者や観客の発言をメモすること |
| オ | 児童の授業中の発言を黒板にすべて記述し、ネームプレートを貼ること |
| カ | 授業をビデオや音声で録音すること |

その中でも、アとイを中心に見取りを行ってきた。それは、道徳科授業の中に「今日の授業で分かったこと、考えたこと」を書く時間を設定することで、記述中や提出する際に記述を基に面接をし、評価の材料として手元に残るからである。そして、ウやエを補助的な資料として用いてきた。

その後、2019年4月、1学年児童を担当することになった。1学年児童は文字を読んだり、書いたりすることが発達段階的に難しいため、筆者が従来から行ってきた記述を用いた見取りやその記述を基にした面接ができなかった。そのため、1学期における小学校1年生の道徳科授業における児童の学習状況の見取りを効果的に行う方法を探す必要があった。

1学年児童の実態として、「読むこと」「書くこと」よりも「聞くこと」「話すこと」が比較的得意である。その実態に合致する視点として、専門家会議は「発言が多くない児童生徒」、「考えたことを文章に記述することが苦手な児童生徒」を評価する際の着目点として「教師の話や他の児童生徒の話に聞き入り、考えを深めようとしている姿」を挙げている。また、永田（2003）³⁾は、評価に対する基本的な構えとして、「子どものだれもがよりよく生きたいと思い、そのような力をもっている。そのための成長を信じ願う姿勢をもって評価を進める」と述べていることから、1年生児童が「聞いたり、話したりする姿」を肯定的に捉え、評価の柱に据えなくてはならない。

筆者が考える評価を行う際のポイントは、「授業者が一人でできること」、「記述や発言の根拠を見取ること」「授業の中で実施可能」といった点である。しかし、授業を行いながら児童の発言や姿勢を見取り、記録することは容易ではな

*上越市立柿崎小学校

いし、評価は無理なく、継続的に行うことができる方法が望ましい。表1のオは授業の進行の妨げになること、カは記録起こしに時間がかかることから、活用しづらいと考える。そこで、小学校1年生の1学期の道徳科授業における児童の学習状況の見取りを効果的に行う方法として、表1のエの実践を基にその効果を考察することにした。

2 研究の目的

役割演技を行う際の授業者の監督役割に着目し、1学期における小学校1学年児童の学習状況の評価の在り方を実践的に考察していく。

3 研究内容と方法

(1) 研究の内容

① 役割演技を取り入れることができる教材の検討

1学期に行う道徳科授業の教材を分析し、役割演技に適した教材について検討する。

② 役割演技の監督役割に着目した評価の検証

北川ら(2013)⁴⁾は、役割演技の監督役割を表2のように示している。本実践では、役割演技を用いた道徳科授業を行い、児童の学習状況を記録した。

表2 役割演技の監督役割

| |
|--|
| 演出者役割 |
| 1. 観客の中から、主役・相手役(補助自我)の選定を行い、場面設定を行う。 2. 状況設定を行う。 3. セッションのスタート、中断をする。 |
| 分析者役割 |
| 1. 演者が何を感じたのか、思ったかについて解釈、見立てのための質問を(演者に)行う。 2. 観客から情報を得て、解釈をするための質問を(観客に)行う。 3. 監督が理解したことの伝達、確認、訂正を行う。 |
| 発達援助者役割 |
| 1. 明らかになったことを演者や観客にフィードバックして、役割演技を通して分かったことを参加者が自分のものとして受け取れるようにする。 2. 演者や観客を受容、承認したり、共感的に話を聞いたりするような癒しを行う。 |
| 授業者役割 |
| 1. 演者が互いにどんなことを経験したのか、観客が何を経験したかや感じたかについて明らかにするための話し合いの司会を行う。 2. 演じる意欲、見る意欲を向上させ、参加者が役割演技に集中できるように促す。 3. 質問に対して受け答え、話を聞いているときの繰り返しや相づち、不明な場合の聞き返しを行う。 4. 時間配分やその時間の目的などを考えて進行したり、終了の判断をしたりする。 |

(2) 研究の方法

① 教材の分析

道徳科授業で役割演技を用いることに適していると判断した教材の内容、登場人物の役割、役割演技で演じる場面設定を明らかにする。

② 学習状況の見取りの方法

授業中の記録だけでなく、役割演技やその振り返りをビデオで撮影し、発言や態度を見取っていく。

4 実践の概要

(1) 役割演技を用いた道徳科授業

1学期に行った道徳科授業は、表3のとおりである。11時間の内、役割演技を行ったのは、4時間である。役割演技を取り入れた教材に共通していることは、主人公とその相手役が存在していることである。また、場面設定については、教材の結末をカットしたり、最後まで読んだりしながら、その後を役割演技を用いて演じさせている。表3の教材で、主人公と相手役が存在していても、児童が登場人物に自我関与しづらいと思われる教材は、役割演技を実施しなかった

(表3では、「場面の設定について」で「なし」と表記)。

表3 1学期に行った道徳科授業 (『みんなのどうとく 1ねん』学研)

| 教材名 | 内容 | 資料の形態 | 登場人物 | 場面の設定について |
|----------------|--------|--------------------|------------------------|--|
| あかはいあいさつ | B-(8) | 場面ごとのイラスト資料 | 複数 | なし |
| はりきりいちねんせい | A-(1) | 場面ごとのイラスト資料 | 複数 | なし |
| かぼちゃのつる | A-(3) | 場面ごとのイラスト資料 会話文 | かぼちゃ はち ちょう | かぼちゃ役とはち役を決め、つるがひかれた後に、再び、はちと出会う場面を設定。 |
| ぼくは、きゅうしよくとうばん | C-(12) | 読み物資料 | ぼく せんせい おかあさん | なし |
| はやとの ゴール | B-(6) | 読み物資料 | はやと おばあさん | はやと役とおばあさん役を決め、おばあさんの家に到着した場面を設定。 |
| きんのおの ぎんのおの | A-(2) | 読み物資料 | おとうと あに かみさま | おとうと役とかみさま役を決め、かみさまからきかれた場面を設定。 |
| めだかのめぐ | C-(14) | 読み物資料 | めぐ 先生 みんな | なし |
| じゃんけんぼん | C-(11) | 読み物資料 | こうき みのり | こうき役とみのり役を決め、泣いたみのりに声をかける場面を設定。 |
| おじいちゃんのたんざく | D-(17) | 読み物資料 | まきお おかあさん おじいちゃん | なし |
| げんきでね、あげはくん | D-(18) | 読み物資料 | わたし あげはくん | なし |
| おかしくないかな | C-(10) | 場面ごとのイラスト | 多数 | なし |

(2) 役割演技を取り入れた授業の実際

2019年5月28日に、当校の第1学年1組の児童17人を対象に行った。

① 主題名

あたたかいところ B-(6) 親切, 思いやり

② 教材名

「はやとのゴール」 『みんなのどうとく1ねん』学研

③ 教材の概要

主人公のはやとはサッカーでゴールを決め、うれしくなっている。その帰り道に、近所のおばあさんが重そうに荷物を持って歩いている姿を見付け、しばらくついていく。困っているおばあさんを察知し、はやとは荷物運びを手伝う。おばあさんの家に到着し、おばあさんからお礼を言われ、はやとは何回もゴールを決めたようなうれしい気持ちになる。

今回は、おばあさんの家に到着したところから役割演技を始めることにした。

④ ねらい

困っているおばあさんの荷物を持った後のはやととおばあさんを演じたり、演じている場面を見たりすることで、相手のことを考えて、優しく接することの大切さが分かり、親切な行為をしていこうとする態度を養う。

⑤ 授業の構想

教材を「困っているおばあさんを見付けた場面」「はやとが思い切って声を掛け、おばあさんの顔が笑顔になる場面」「おばあさんの家に到着する場面」に分けて、挿絵を使い、読み聞かせながら授業を進める。

発問1 自分が困ったときに、だれかから助けてもらったことはありますか。その時、どんな気持ちになりましたか。

発問2 おばあさんを見たはやとさんは、どんなことを考えていると思いますか。

発問3 どうしておばあさんは笑顔になってきたと思いますか。

発問4 はやとさんとおばあさんは、おばあさんの家の前に着きました。二人はどんなお話をしたと思いますか。

役割演技を行う。

⑥ 役割演技の実際

本実践は、筆者のメモとビデオからプロトコルを起こした。役割演技は、場面設定、役割演技を行った後、観客へのリフレクション、演者へのリフレクションの順で行っている。これは、観客のリフレクションを聞くことで演者が自分の行為について考えたり、意味付けしたりすることができるようにするためである。また、演者に質問をした際に、返答が短い場合は、再度質問をして演者の行為に対する根拠を聞き取るようにしている。

ア 場面設定（演出者役割）

役割演技を行う前に場面設定を以下のとおり行った。授業中の発言を基に、おばあさん、はやとに自我関与していると思われる児童を演者に選んだ。

T：授業者 C1：おばあさん役 C2：はやと役

T：おばあさん、はやとさんが「荷物を持ちましょうか」と言ってくれた時どんな気持ちだった。

C1：うれしかった。

T：荷物を持ってきて、おばあさんの家の前まで行きました。おばあさんは、はやとさんに何と言いますか。

C1：ありがとうって言う。

T：はやとさん、恥ずかしかったけれど、「おばあさん、荷物を持ちましょうか」と言ったら、おばあさんが喜んでくれたんだね。じゃあ、荷物を持って、おばあさんの家の前に着いたところから始めるよ。

T：みんなも、自分だったらどんなことをお話しするか考えてね。

T：それでは、おばあさんの家に着きました。どうぞ。どちらから始めてもよいですよ。

イ 役割演技

C1：「ありがとう。」

C2：「はい、ええっと、どういたしまして。また困ったことがあったらいつでも言ってね。」

C1：「はい。」

観客：すごい。

ウ 観客へのリフレクション（分析者役割、発達援助者役割）

T：はじめにおばあさんは、はやとさんに何と言いましたか。

C3：「ありがとう」と言いました。

T：このときのおばあさんの顔はどんな顔をしていましたか。

C4：うれしい顔。

T：それはみんな同じ？

児童：うん

T：この後、はやとさんはありがとうと言われて何と言っていましたか？

C5：「どういたしまして。」

T：この時のはやとさんの顔、見た人いる？

C6：忘れしました。

C7：にこにこ顔だった。

C8：笑顔だった。

C9：忘れしました。

T：このあと、また、はやとさんがおばあさんに何か言っていたね。覚えている人はいますか。

C10：「また、なんか困ったら……。困ったことがあったらまた呼んでね。」

T：「困ったことがあったら、また呼んでね」って言っていたね。

T : それ, 覚えている人。
 児童: 11人挙手
 T①: どうして, おばあさんは, にこにこしながらありがとうって言ったのだろう。
 C11: はやとさんから荷物を持ってもらったから嬉しくなった。
 T②: なんで, はやとさんまでにこにこ顔になったの?
 C7: 「ありがとう」って言われて, うれしいなって気持ち。
 T : おばあさんからありがとうって言われて, うれしい気持ちになったんだ。
 C2: (うんうんとうなずく。)
 C5: おばあさんが笑顔になったから, (はやとさんは) 笑顔になった。
 T : おばあさんが笑顔になったから, はやとさんも笑顔になったんだ。

T①の質問に対して, 観客C11は, おばあさんの置かれた立場に自我関与しながら親切な行為をされた時の気持ちを振り返っている。

T②の質問に対して, 観客C7は, はやとさんの置かれた立場に自我関与しながら親切な行為をし, 感謝された時の気持ちを振り返っている。その発言を受け演者C2はうなずいていた。さらに観客C5の発言からは, 「親切にすることで相手は笑顔になり, さらに自分も笑顔になった」と理解することができる。短い役割演技の内容であったが, 観客は演者の演技に自我関与しながら道徳的価値のよさを実感的に理解し, 演者は観客の児童の解釈を受けて, 自分の演技に対する振り返り(解釈)を行ったと言える。この解釈から, 次のような演者の分析が可能となった。

エ 演者へのリフレクション(分析者役割, 発達援助者役割)

T : おばあさんはどうしてにこにこ顔になったんですか。
 C1: 荷物を持ってもらったから。
 T③: ああ, 荷物を持ってもらったからうれしい気持ちになって笑顔になったんだ。
 C1: (うなずく。)
 T④: はやとさんは, おばあさんから「ありがとう」って言われて, にこにこ顔で「どういたしまして」って言ったでしょ。どうして, にこにこ顔で言ったの?
 C2: 嬉しかったから。
 T⑤: どうして嬉しかったの。
 C2: 「ありがとう」って言われて嬉しくなった。
 T : あっ。「ありがとう」って言われて自分も嬉しくなったんだ。
 T : でも, 荷物重かったでしょ。荷物重かったけど, 「ありがとう」って言われて嬉しかったんだ。
 C2: (うなずく。)
 T : はやとさん, 「また, 困ったことがあったら声を掛けてください」って言ったでしょ。何で言おうと思ったの。
 C2: また, 困ったらいろいろ大変なこと起きたら, 呼んでねって(思ったから)。
 T : 困っている人を見たら, 自分は助けたいなという気持ちがあったんだ。
 観客: 渡る時とか, 荷物, 重いからね。
 T : おばあさんと, はやとさんに大きな拍手をしましょう。

T③の解釈を聞いたC1はうなずいていることから, 親切にされたことによって嬉しい気持ちになったことを実感的に理解していることが分かる。また, T④でC2が行った演技について根拠を問うているが, 「嬉しかったから」と一言で述べるに留まっていたので, 再度T⑤でC2に質問した。すると, C2は「ありがとうって言われて嬉しくなった」と理由を述べることができた。このように, C2は相手に優しく接することで, 自分も嬉しくなることを実感を伴って理解することができたと考える。

ところで, 場面設定から演者へのリフレクション終了までの時間は, 約7分間だった。その時間内で, 実際にメモをとることができたのは, イ(役割演技), ウ(観客へのリフレクション)であった。エ(演者へのリフレクション)は, 演者の肩に手を置いたり, そばに寄り添ったりしながら監督役割を果たすため, メモを取ることができなかった。しか

し、ビデオでメモの内容を補完することで、演者や観客が他の児童の発言に同意する場面を見取ることができ、学習状況の把握をすることができた。

5 考察

役割演技を用いたのは、内容項目の如何に関わらず、登場人物の会話のやりとりがある読み物教材であった。登場人物が親、祖父、昆虫だった場合は、児童の生活体験から登場人物の心情が想像できないと判断し、役割演技を実施しなかった。しかし、「はやとのゴール」の祖母役については、日常生活の中で荷物を持ったり、持たれたりする経験から、祖母の心情に自我関与しながら発言する児童がいたため、役割演技を実施することができた。これらのことから、教材だけでなく、児童の生活経験の実態や授業中の発言を基に役割演技実施の可否を判断することができることが明らかとなった。

また、役割演技を用い、観客が演者を「見る」ことで、児童が分析者としての役割に徹することから、授業者は、授業中に児童の学習状況を無理なく記録することが可能であることが分かった。一方、演者のリフレクションにおいては十分メモすることができなかったが、撮影した映像と併用することで、授業後に短時間で学習状況を把握することは可能であると考えられる。

今回の役割演技は、1年生になってから2回目であった。そのため、やりとりがとても短くなっている。しかし、役割演技の観客が演者の役割演技を通して道徳的行為についての自分なりの根拠を述べていたように、教材の続きを役割演技で演じると、観客にとって道徳的価値に対する焦点化が図られることが、観客に対して行ったリフレクションから明らかとなった。また、演者に対して行ったリフレクションの内容から、演者は観客の児童の発言を聞くことで、道徳的行為に対する多様な考えが深まったことが明らかとなった。このように考えると、役割演技を取り入れることは、単に評価材料を集める場となるだけでなく、監督役割を発揮することで、児童が自ら解釈したことを明らかにし合ったり、明らかになったことを演者や観客にフィードバックしたりすることで、深めたい道徳的価値の理解の内容が焦点化され、その過程を丁寧に見取ることにつながる。授業のねらいに即した指導と評価の一体化を図り、学習状況の様子を見取る上でも、役割演技を取り入れることは、有効であると言える。

6 成果から見た今後の課題

効果的な指導法の一つである役割演技を、道徳科授業に取り入れることは、評価においても効果的に活かすことができることが明らかとなった。これは、小学校入門期の児童だけでなく、他学年で実施する道徳科授業でも有効な方法であると考えられる。

一方、役割演技を用いることに適さないとと思われる教材において、見取りの方法を探っていく必要がある。児童の発言や姿勢を肯定的に捉えることで、「よりよく生きようとする力」が発揮され、豊かな心情が育っていく。児童を肯定的に見取る方法を、さらに豊かにしていきたいと考える。

【参考・引用文献】

- 1) 文部科学省 2015 『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 pp.105-106
- 2) 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議 2016 「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について(報告)」 pp.7-11
- 3) 永田繁雄 2003 『初等教育資料 11月号 No.787』 p.28 東洋館出版社
- 4) 北川沙織, 茂木博介, 早川裕隆 2013 『人間関係づくりの基盤となる道徳の時間の創造と支援』(道徳教育実践研究7) pp.40-73 一部改編 上越教育大学道徳教育研究室 未公開